

目次

- ・ 2025年度九州支部「出前授業」後半の部ご報告……中村久志 (pp. 2-4)
- ・ 小出檣重「池畔盛夏」について……吉村直哉 (pp. 5-7)



小出檣重「池畔盛夏」*

* 編集委員会より：小出は1931年に亡くなっており、当時の著作権法（没後30年）に従い、作品は1962年以降、著作権の消滅したパブリックドメインとなっています。その後、著作権法が改正されたため、現在の保護期間は画家の没後70年となっていますが、既に本作の保護は満了しているため、改正による延長はありません。

2025年度九州支部「出前授業」後半の部ご報告 ～高専生へ、ものづくりの楽しさをお伝えする～

中村久志（S56/1981卒）

九州支部では、活動の柱の一つである「ものづくりの魅力を若者へお伝えする」の見地で、昨年までに、高校2校ですでに実施。今回は1月に実施した高専2校の内容をご報告いたします。

1: 国立「北九州工業高等専門学校」編（1月13日）

『プラスチック循環社会の実現を目指して

～PET樹脂の事例に学ぶ～

地球環境とプラスチック文明の共存の道』

講師：千々木亨氏（S54/1979卒）



一昨年（2024年6月）久留米高専での講義を「リモート参加」の形で実施した経緯から、今年是对面での「出前授業」が実現できました。参加者は、1年生全員約200名・・・化学系の時間をに使わせていただき、「ペットボトル」の問題をフックに、グローバルな環境問題についての講義を行いました。講師は、京機会前会長の千々木さん（S54/1979卒）です。いうまでもなく、環境問題についての造詣も深く、かつ産業活動の最先端からの視点で、理想と現実のギャップや矛盾点までも、鋭くかつ解り易くお話をされ、200名という多くの学生さんも、熱心に取り組んでいました。また、高専の先生からも、「自身の理解が深まった」「誤解している点もあった」といった、率直な感想をいただきました。高校の授業とは違い、



また、高専の先生からも、「自身の理解が深まった」「誤解している点もあった」といった、率直な感想をいただきました。高校の授業とは違い、

高専の学生さんは、ある程度、自分自身の進路を定めておられるので、技術の深堀の話が、学生さんたちの心をつかんでいるように、感じました。

ありがたいことに、講義後の先生との話の中で「来年度も是非お願いします！」との嬉しいオファーもいただきました。

※現在、参加者ほぼ全員の、200通近いレポートをいただき、質問も中にはあり、きっちりお返ししたいと読み込んでいます。興味を惹かれる個性的な内容も満載で、『出前授業』の醍醐味の一つです。

2: 国立「久留米工業高等専門学校」編（1月30日）

『日本のロボット発展とともに歩んだ研究開発の日々』

講師：村上弘記氏（S60/1985卒）



久留米高専での授業は、元九州支部長藤川さん（S42/1967卒）のコロナ期2022年（リモート授業）から実施。2023年は対面で藤川さん、2024年にDMG森精機株式会社、廣野さん（H19/2007卒）の「MXで製造業に革命を起こす」、と継続してきました。

今年は、講師に関東支部長でもあるIHI(株)村上さん(S60/1985卒)・・・元日本ロボット学会会長にお越しいただき、主に専攻科の学生さんに向けた授業をしていただきました。専攻科は、高専5年を終了後、専門課程に進んだ学生さんたちです。約30名の参加。年齢的にも、大学の学部生と同じで、個々人の醸し出すスタイルも、グッと大人になった雰囲気です。



講義内容は、「学生時代にロボット工学を選んだことから、今に至るまでロボット工学を活用する仕事に取り組んできた、様々な開発」ということで、自身の経験に基づく「他では聞けない話」や、グローバルな視点での、ロボットの発達史で、ロボットの起源や現在の状況、未来への展望など「一大スペクタクル」を観るような感覚となりました！（村上氏の若き時代の、活躍されている動画は必見です！！）

専攻科の学生さんは、機械・電気・化学など様々ですが、直接の専門ではない方にも深く響いたようで、講義後も駆け寄って、質問などもされていました。

※学生さんたちのレポートもさっそく送っていただき、読み込んでいます。「普段聞けない話」に大きな興味を持っていただけたようで、私共にとっても大いに参考になります。※担当の先生とも、講義前に懇談させていただき、現在の技術動向や高専を取り巻く社会環境などの話題で、大いに盛り上がりました。



「出前授業」についても、年間カリキュラムに取り込むことの難しさなどがあるものの、その価値をお認めいただいております。次年度の継続も前向きに、今後、相談させていただく事となりました。◆以上が、2か月連続掲載させていただきましたが、九州支部の「出前授業」 高校2校・高専2校の実施状況の報告となります。2025年初頭から計画した行事が、何とか終了することができました。

関係者の皆様、ご協力、本当にありがとうございました！

2026年度も、今回の4校の継続と、ご縁があれば、他の学校も出来ないか模索していこうと思っています。

※そのために、皆様からの情報のご提供やご協力をぜひお願いいたします。

- ・「出前授業」候補の学校・・・人的つながりなど含めた情報
 - ・「講師」希望の方・・・「よし、やってみよう！」と思われた方
- 是非ご連絡をいただきたく、お願い申し上げます。

➡ 京機会事務局、あるいは九州支部 中村 まで

●今後も、九州支部は、「九州・アジアの魅力発見！」「出前授業で社会貢献！」をモットーに活動してまいります！！

小出櫓重「池畔盛夏」について*

吉村直哉 (S60/1985 教育学部卒)

1. はじめに

昨年（2025年）大阪中之島美術館で小出櫓重の回顧展が開催されました。小出櫓重は私の母校、大阪府立市岡高等学校の前身である旧制市岡中学の卒業生であることを昔から知っていたので、私は25年前の京都国立近代美術館での展覧会にも行っています。そのとき出品されていた京都大学工学部所蔵の「池畔盛夏」が昨年の展覧会では展示されていないことに気づきました。そこでネットで検索してみますと、『京機短信』に関連記事があることが分かりました。それはこの絵を京都大学機械工学科教室が所蔵する経緯をお尋ねの内容でした（No.343**）。もう5年以上も前のことなので、既に解決済みかもしれないと思いましたが、一応貴会に問い合わせてみることにしました。そうしますと、すぐに鈴木基史先生よりお返事をいただき、絵を見る機会を与えてくださいました。その際、私が集めていました資料をご覧いただきました。

その資料を今回まとめてみましたので、この紙面をお借りしまして、ご報告いたします。

2. 「池畔盛夏」

絵は油彩の風景画で、大きさは30号位（61.6 × 97.9 cm）。絵の右下に小出櫓重のサインがあるが、額の裏にも「池畔盛夏 小出櫓重 一九一七年八月」の小出の直筆と思われる書が収められている。

この「池畔（ちはん）」とは池のほとりの意味で、池は奈良の荒池（あらいけ）のことだと思われる。荒池は奈良公園の東側に位置し、1888年用水池として再築

* 2025年10月、桂キャンパスの機械系大会議室に掲示されている絵画について、吉村様から連絡をいただきました。吉村様は市岡高等学校のご出身で、小出や甲田と同窓生とのこと。私どもが知らなかった多くの情報を提供していただきました。そこで、厚かましくも京機短信への寄稿をお願いしたところ、快くお引き受けいただき、この原稿をいただくことができました。なお、吉村様からいただいた資料は、小出櫓重の画集とともに、京機会の事務局に保管しています。ご興味のある方は事務局までご連絡ください。

鈴木基史 (S61/1986 卒)

** https://keikikai.jp/wp-content/uploads/2020/07/tanshin_no343.pdf

されたものである。

小出には1915年から1920年まで奈良の風景を描いた作品が9点ほどある。その中で「池畔盛夏」は大きさでは最大級のものである。この絵の前には「池畔初夏」（1915年）と題する作品もある。

小出は1917年6月に結婚し、まもなく夫婦で奈良の浅茅ヶ原の料理旅館「江戸三」の亭に移り、ここで数か月滞在している。このときに「池畔盛夏」は描かれたもので、その位置関係から浅茅ヶ原から見た荒池の風景と思われる。

3. 小出櫓重

小出櫓重は1887年大阪市の島之内に生まれた。生家は「天水香」で知られた薬屋であった。1907年大阪府立市岡中学校を卒業すると、東京美術学校の日本画科に入学する。その後西洋画科に転科し、1914年卒業する。卒業後は帰阪し、画業に専念するが、文部省美術展覧会に続いて落選するなど、不遇の時代が続く。1919年第6回二科展で「Nの家族」が樗牛賞を受賞してはじめて世に出ることになる。その後、1931年43歳で亡くなるまでの11年余りが活躍の時期となる。この間、欧州に外遊し、大阪では信濃橋洋画研究所で後進の指導に当たるなどの活動をしている。油彩画の外に、ガラス絵、水彩画、挿絵だけでなく、随筆も手がけている。特に「裸婦の櫓重」と称され、裸婦像に独自の様式を築いた。

4. 京大所蔵までの推考

小出櫓重には自筆の作品控が残されており、そこには、「夏の池畔 横長30号位 甲田君より京都帝大内。」とある。これにより、この絵は小出より甲田を通じて京大に渡ったことが分かる。

甲田とは甲田俊三（こうだしゅんぞう）のことで、小出と同じ市岡中学の2期生である。中学卒業後は第三高等学校から京都帝国大学工科大学機械工学科に進み、1917年に卒業している。この関係から機械工学科が所蔵するところになったと思われる。

小出櫓重は、旧制市岡中学の1期生として入学しているが、2年生の時に心臓疾患が判り、2年次を休学し、卒業は2期生となっている。それで、小出の苦難の時には、1期生と2期生が集まり、絵を購入したり、お金を渡したりして小出を支援した。

1918年2期生は新たに「二生会」を結成し、事務局を小出が務めることになった。この二生会のメンバーに甲田の名がある。この年甲田は既に就職しているので、

甲田が絵を手に入れたのはこの頃かもしれない。

仮に甲田が絵を京大に寄贈したとすると、それは小出の名が世に知られるようになってからのことではないだろうか。そうすると、それは1919年の二科展入選での画壇デビュー以後となる。

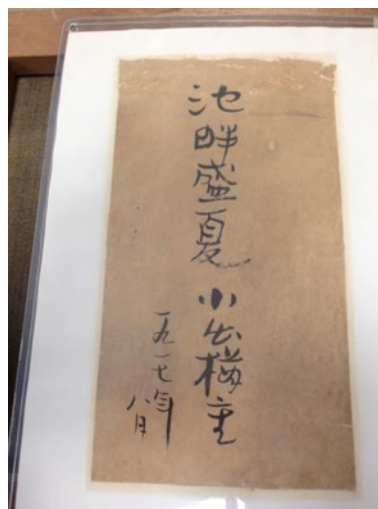
上記の小出の作品控の最後の記述は1929年の作品についてである。この作品控の作成年は不明ではあるが、遅くともこの頃までには京大の所蔵となっていたとも考えられる。

なお、甲田俊三は1917年日本兵機製造会社に就職し、その後工場長次席となり、1920年に会社が大阪機械工作所と改称すると、設計課長、研究部長等を歴任している。1935年には関西スレート株式会社を創立し、その初代社長に就任している。1943年には社長を退任しているが、この頃に亡くなったようである。

5. おわりに

絵を通じて小出と甲田の交流に思いを馳せると、市岡高校の校歌で歌われている「家族制」という言葉を思い出します。これは坪井仙次郎初代校長が創立当時から掲げたもので、一校を一家と見なし、師弟は父子、生徒は互いに兄弟とする家族のような学校が市岡の一般の評語でした。この精神が卒業生の心の中には在り続け、同窓生が小出櫓重を助けることになったのではないのでしょうか。

現在、絵は桂キャンパスの京都大学機械系教室の会議室に掛けられています。時には公開していただいて、より多くの方が鑑賞できる機会を設けていただければ幸いです。



額の裏に貼付されたサイン